

「できるだけ家庭的ふんいきで」

三才児の生活

村石京子

三年保育の級は十五名であり、この級は男児七名、女児八名で一学級を編成していた。その中は四月生まれから三月生まれまでにわたりてゐる。満三才頃の年令において生まれ月による差のあることは当然として考えられる。同じ一級の中では生活しているけれど、一方の児児はついこの間満三才の誕生日を迎えたばかりであり、一方ではもうじき四つになるという子どもである。教師はこの生まれ月による差をよく考慮しなければならない。

児児による差のあることは当然として考えられる。同じ一級の中では生活しているけれど、一方の児児はついこの間満三才の誕生日を迎えたばかりであり、一方ではもうじき四つになるという子どもである。教師はこの生まれ月による差をよく考慮しなければならない。

いう氣持がある。

新幼稚園教育要領の第三章(5)に次の項がある。「入園当初においては、教師は個々の児児に特に細かな心づかいをもって接し、できるだけ早く教師や他の児児に親しませ、喜んで登園するように導き、幼稚園における生活に慣れさせ、安定した氣持で幼稚園生活を楽しむことができるようすること」

ここをよむと実に三才児の保育について、教師のもつべき保育の中心的ねらいがみごとにでいると思う。昨年一年間、三才児と一緒に生活してきたが、その年間の目標どし、毎学期の目標としたことが全くそのまま新しい教育要領の中のこの一節に当るのであつた。ただ三才児の場合に年令を限つて考へたならば、「入園当初においては」という表現が「三才児においては」とかわつてくるのは当然であるし、また「できるだけ早く」ということばを()の中に入れててしまいたいとある。

何故なら教師の側の希望としては三才児であつても勿論一日も早く幼稚園の生活になれ、友だちや教師と親しみ、幼稚園の生活を楽しむようになつてほしいとねがうのであるけれど、三才児の実態はあまりに幼く、そして個人差が大きいことに気づくと、できるだけ早くこうした状態になつてほしいと念じながらも、一方では決してあせつてはならないと反省をくりかえすからであった。

そのため三才児の初期から順調にこの目標に沿つてすべりだした者もあれば、なかなか方向の定まらない者もあつたけれど、とにかく年間の目標として三月までには級の全ての児児が、安定した氣持で幼稚園生活をじゅうぶん楽しむまでに成長できるように、教師も細かな心づかいをもつて接するという氣持をきわめるには決して少ない人数ではなく、む

しろ手一ぱいという感じさえしてくるのであつた。

この子ども達に共通なことはこの四月から幼稚園という新しい社会集団、それは家族集団とは別の意味をもつ集団のメンバーになつたという点である。子どもが新しい集団の中抵抗なく入るため、できるだけこの新しい集団のふんいきを家族集団に近いものにしたいとのぞんだ。子ども達には気やすく緊張なく入ってもらいたいという気持ちのもとに、今まで家でしていたと同じように自由にふるまい、何でもしたいことを好きにやってあげるということを身体で感じとつてもらえるようにした。おもちゃも個人的なものを揃え、そして数も比較的豊かに揃えた。また父母にも、幼稚園に行ったらこうこうしなさい、というようなよい子の規約を子どもに与えないでほしいということを話し、あるがままの姿を見せてもらえるようにしていった。

このような配慮のもとに一学期をふみ出したが、やはり一学期はさまざまのことがあつた。男児ではかなり攻撃的で落ちつきのないAや、心配性でうまくみんなの中に入れずそのいらだちが自分の思いとは逆にじつとうずく

まつてしまつたり、あるときは暴れてしまつたりする

Bに特に手がかかった。女児はわりあいに集団生活にすっと入れた

がやはりちょっととしたことで不安定になつて泣く者が

二と三名あつたが、中でも

C子は今にこにこして遊び出せたと思う

ともう次の瞬間には大きな声をはりあげ

て泣き出すことがたびたびであった。ま



ぼく、さかさまに上っちゃうよ



ママのとこへ行きたいのよ

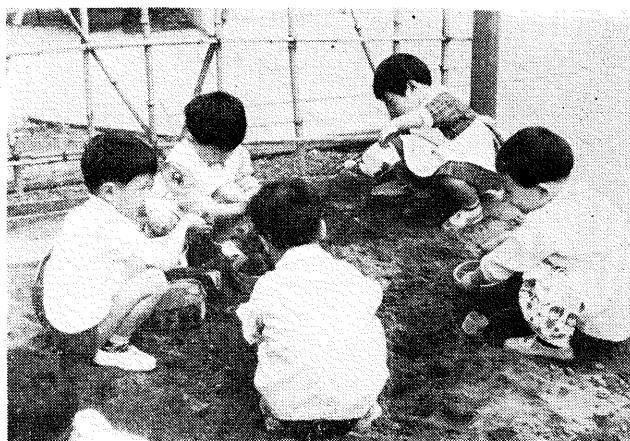
アブクたった にえたった



た、はじめの頃順調に園生活の一歩をふみ出したよう見られたD子は、おもちゃをとりあとと絶対にゆずらずにその剛情さに目を見はる思いをする折もある程であった。ちょつと目をはなすと泣き出すC子に片手をあずけ

ながら、おもちゃで元気にあそび出した数名にほっとする間もなく、Aはせっかく他の子になれたりすることなどを行なつていった。ともがつくつた積木を体あたりでくずしてまいたちまちんかが始まる。やつとなだめた時、今度はままごとの場でD子が他の女児の使っていた人形を強引にとろうとする。片方ははなすまいとし、D子は無理にとろうとしてとうとう相手の子どもの洋服にむしゃぶりつき相手は泣き出す。こんなことのくり返しも最初の数週にはよく起つたが、はじめは短かかった保育時間も順次のばして通常の保育時間に落ちついた頃から、友だち関係も次第につながりができる、一しょにあそびたいという意識が少しずつみられるようになった。教師が仲立ちをすれば、かごめかごめとか、あぶくたつたといった集団あそびが喜ばれるようになつたのもこの頃である。

保育内容の面では一学期は幼稚園の生活になじむことと、必要な生活習慣を身につけることが中心であるから、自由あそびが殆んどといつてもよい程でその間に一しょにうたをうたつた



お砂場

ながら、おもちゃで元気にはさみのあつかいしたように見られたD子は、おもちゃをとりあとと絶対にゆずらずにその剛情さに目を見はる思いをする折もある程であった。ちょつと目をはなすと泣き出すC子に片手をあずけた時、今度はままごとの場でD子が他の女児の使っていた人形を強引にとろうとする。片方ははなすまいとし、D子は無理にとろうとしてとうとう相手の子どもの洋服にむしゃぶりつき相手は泣き出す。こんなことのくり返しも最初の数週にはよく起つたが、はじめは短かかった保育時間も順次のばして通常の保育時間に落ちついた頃から、友だち関係も次第につながりができる、一しょにあそびたいという意識が少しずつみられるようになった。教師が仲立ちをすれば、かごめかごめとか、あぶくたつたといった集団あそびが喜ばれるようになつたのもこの頃である。

二学期は幼稚園や社会の行事が三才児の保育内容の面では一学期は幼稚園の生活になじむことと、必要な生活習慣を身につけることが中心であるから、自由あそびが殆んどといつてもよい程でその間に一しょにうたをうたつた

○二学期
「いろいろな経験をする」

二学期は幼稚園や社会の行事が三才児の保



育内容の中にもたくさんもられていった。運動会、遠足、芋ほり、クリスマス、お正月を迎える、等々。これらを六領域におりこんだ活動をし、更にその他にも経験内容を豊かにしたいと心を配った。例えば一学期にはあまりあつかわなかつた描画や製作の新しい材料も少しづつ入れていつたりもした。

日の経つのも早いけれど、子どもの成長も加速度的である。この学期の出だしにも、長い夏休みのあとで多少幼稚園での習慣や心の安定がくずれた時期もあったけれど、これは一学期のように白紙から染めていくのではな

いたが。」このことをのぞけば級の生活は軌道にのり、破壊活動やトラブルは見違えるようへつたので、のびやかにそして落ちついた生活をもてるようになった。

○三学期

「みんなで仲よく」

三学期は、間に入園検定のため園児は休みの日があつたりして暦の上よりも登園日は少ないけれど、やはり実質としては最も充実を得、まとまりをもつた学期であったといえよう。この時期の子どもの成長をみると、それ以前は遊ぶにしても教師や友だ

いのでできていくのも早かった。しかし困ったこともあつた。一頃おさまっていたC子の泣きぐせがこの学期の中頃からはじまって、いろいろ手をつくしたけれど結局冬まで持ち越してしまったことである。（これは三学期の始まりを契機としておさまることがで

りから一步で、いろいろ工夫があつておもしろくなってきた。この頃以前と比べて目立って進んだ点は次のようなことである。（これは勿論、三才児の程度としてである。）

- あそびに目的をもつていてる。



●自発的にあそびに参加できる。

●あそびの役割をはたす。

●あそんだとの始末がすすんでできる。

また友だち関係にも巾が出て来てグループ

であそぶことが多くなり、いわゆるごっこあ

そびが盛になってきた。例をとつてみると、幼稚園ごっこ・お店やごっこ・バトロールごばし協調性を高めることの大切さを自然と身につけていったことも大きな要素となつたとトムごっこなどのあそびがくり返し行なわれ、次第にそのあそび方も複雑になつていった。またこの学期には、教師の側からの勧きかけで劇あそびの簡単なものをやってある。そんだこともある。

ごっこあそびの盛になつたことの原因は、友だちあそびが活潑になつたことと、大せいのグループ（級全員であそぶという形もよくとられたが）のあそびがおもしろくなつてきたことにあるといえよう。そしてはじめはみながばらばらであつたのが、友だちとあそぶ楽しさを知り、それをより

楽しく続けるために、個人個人が社会性を伸ばし協調性を高めることの大切さを自然と身につけていたことも大きな要素となつたと考えられる。

* * * *

三学期はみんなであそぶ楽しさを心から味

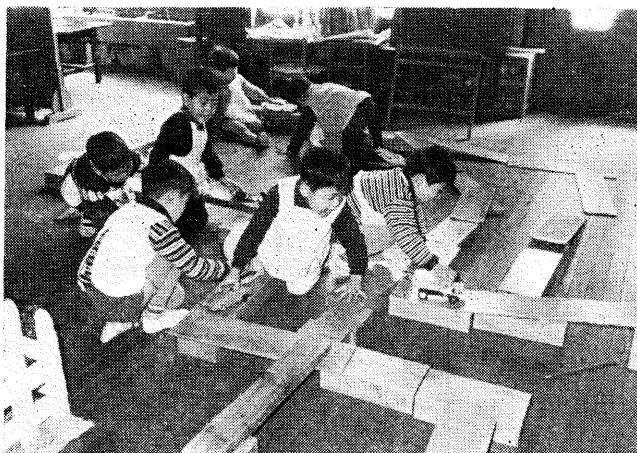
わつた。しかし学期末にかぜなどで欠席の子どもがぱつぱつと歯がぬけたようにいると、子どもの側からも友だちを待つ気持が強くなつてくる。そのような折に来年度はもっと友だちが多くなることを話すと、そうしたら今までよりもっと大せいであそぼうと期待し、新しく入る友だちと一緒に始まる四月の新学期を楽しみに待つ心が日に日に育つのであつた。

四才児の友だち関係とごっこあそび

関治子

四才児の一年間の生活を通して、教師の意図と、児童の活動の実際をとりあげ、再考してみたいと思う。

三才児として一年間幼稚園生活を送った十五名に、新入の二十名を加えた三十五名の組である。何日かたつ間に、幼児期の特徴とは



高速道路つくってあそぼう